

大河内城(大河内御所) (県史跡) (松阪市大河内町城山) (大河内神社)

大河内城（おかわちじょう）は、三重県松阪市大河内町城山にあった日本の城（山城）。城は丘陵の北端に築造されており、東に阪内川、北に矢津川、西側と南側には深い谷が入り自然の要害であった。

概要

応永 22 年（1415 年）、南朝の伊勢国司北畠満雅が両統迭立を履行しない幕府に対する挙兵の際に、備えとして築城。弟の北畠顕雅を入れた。これにより顕雅は、北畠氏諸流・大河内氏の祖となった。

顕雅は、兄・満雅をよく助け活躍したが正長元年（1428 年）、満雅が討ち死にすると、その子・教具はまだ 7 歳であった為、顕雅が職務を代行し、足利義教との和睦交渉を纏めた。

伊勢北畠氏からは大河内、木造、坂内、田丸、星合、岩内、藤方、波瀬の諸氏が分かれ出て、それぞれ御所と称した。木造御所は北畠庶流の筆頭であったが、木造御所は度々幕府側に付き、宗家と対立した。そのため田丸御所（田丸城）・坂内御所（坂内城）・大河内御所・（大河内城）の三家が北畠三御所となり、なかでも大河内御所は代々筆頭とされ、宗家が絶えたときは、これを継ぐ立場であった。

永禄年間、前伊勢国司であった北畠具教が、織田信長の伊勢侵攻に対し、嫡子・具房と共に多芸の霧山城（北畠神社）より大河内城に本拠地を移し、永禄 12 年（1569 年）8 月 28 日より籠城戦を行うも、信長の次男信雄に北畠の家督を譲る条件で和睦し、10 月 3 日、具教、具房親子は城を退去した（大河内城の戦い）。天正 4 年（1576 年）、信雄が南伊勢を統治する拠点和田丸城に移したため、廃城となった。

Wikipedia による

永禄 12 年（1569）8 月 20 日に岐阜を出発した信長は、23 日、前もって寝返りさせておいた木造（こつくり）氏の木造城（現久居市）に入り軍議を開きました。一方、南伊勢を治めていた北畠氏は、信長に対抗するため本拠の多気城（霧山城＝現美杉村）から大河内城に移り、ここに一族郎党を集めて戦いに備えていました。信長は 26 日に木造城を出て、大河内城へ向けて進軍しました。

また、一方では阿坂城主大宮入道が降伏を拒絶していたため、木下藤吉郎らの一隊に攻撃をさせ、阿坂城（現松阪市）を落しました。『信長公記』によれば、藤吉郎はこのとき生涯唯一の傷を負ったとされています。

木造城を陥った軍勢は、翌 27 日大河内城の北東桂瀬山に陣を置きましたが、兵力は織田軍五万、籠城した北畠軍 7,8 千とされています。ここで信長の取った戦術は、部隊を四方に分け、城の周囲を二重三重の柵で取り囲み、完全に外部との往来を断つというものでした。さらに、この戦いでは鉄砲が用いられました。また、当時信長に人質として預けられ、のちに松坂城主となる蒲生氏郷（がもううじさと）が初陣を飾ったということです。

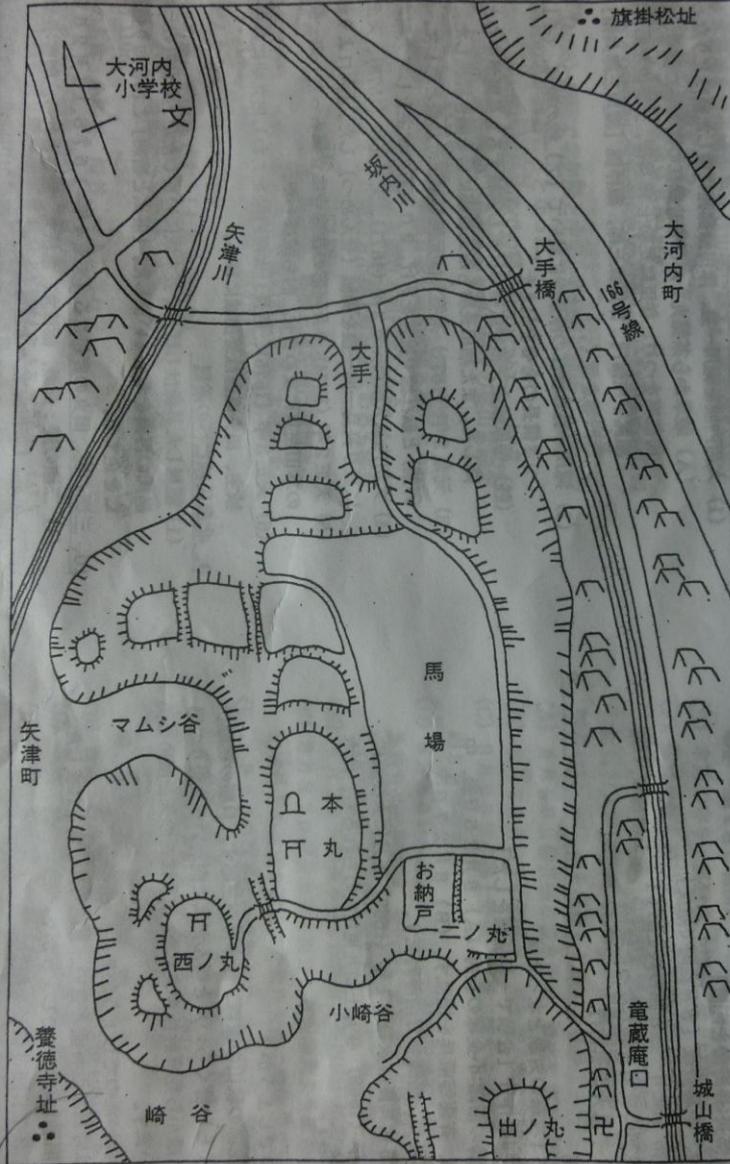
総攻撃をかけてから、竜蔵庵口、魔虫谷の戦闘など多くの戦いがありましたが、大河内の城兵の奮戦で織田軍は有力な武将を失い、大変な痛手を被りました。そして、攻撃開始から二か月になるのに落城しないことに焦ら立つ信長は、城中に使いを送り、北畠具教（ともりの）が多気城を去り隠居するなら自分の三男の茶筈丸（のちの織田信雄）を養子に遣すという和議を申し入れたのです。北畠方はこれを受け入れ、10 月初旬両者は和睦しました。

歴史の情報蔵による



大河内城跡略地図

(原図は山田勘蔵氏作成)



(地元 山際羨一氏史料)

